

千五百番會

二

有吉 保校

千五百番會

二

古典文庫

古典文庫 第一八一冊

昭和三十七年八月二十日印刷発行

非売品

校者有吉保

編集兼
発行者 吉田幸一

合歌番五百千
二

東京都文京区春日町二ノ五〇

印刷者 英和印刷株式会社

発行所 東京都(奥町分室局区内)
北区西ヶ原三ノ三四

古典文庫

電話(五九)二七一一七番
振替口座東京一四五九七番

〔千五百番歌合 夏二〕

千五百番歌合卷第六（無）夏二 判者内大臣子細同前（無）

三百七十六番

左

たちよらはすゝしくやあると結ふ手のしづくにゝころ^{ゐて}山^たの井^まの水^{みづ}

女房

右

通具朝臣

行すゑをたれしのへとてゆふ風に契かをかん屋とのたちはな

三百七十七番

左

左大臣

とふ鳥のあすかの里^をの郭公むかしの声に猶やなくらむ

右

家隆朝臣

軒はもる月の光にかほ^ほる夜は花たち花に秋かせそふく

三百七十八番

左

前権僧正

紅のふりいてそなく郭公紅葉の山にあかぬものゆへ

右

雅經

郭公ね覺さりせはとはかりも思^{にイ}もあへすすくるひとこゑ

三百七十九番

左

公継卿

あすから^かはせゝのいし橋水こへて道たとくし五月雨の比^え

右

寂蓮

五月雨にあさちか末は浪こえてまた埋るゝ庭の遣水^{水イ}

三百八十番

左

公経卿

さらはよし心をかへてほとゝきすきなかぬ空をまち心見よ

右

家 長

むこかはに跡もとゝめぬ本イ 里イ
かはよとになイかはよ鳥井くひも見えぬ五月雨の比

三百八十一番

左

季 能 卿

五月雨に露さへそふるさゝまくらみしかき夜をも明しかねけり

右

三 宮

郭公まちねつよの床のいたまより枕におつる夜半のひと声

三百八十二番

左

宮 内 卿

けふといへはみきはのあやめたさしイちなから末をかたしくひなの夕暮

右

内 大 臣

ふきそむる軒のあやめもみとりにてしのふになるゝよもきふの屋と

三百八十三番

左

讃岐

すゝむへきし水たつねて行道の野中の草を先むすひつる

右

忠良卿

五月雨のしづくににこる山の井のあかて過ぬる郭公かな

三百八十四番

左

小侍従

よそへけむ昔の人を見るにゝて露にぬれたるなてしこのはな

右

兼宗卿

郭公雲井はるかに鳴行は月の都の人もきけとや

三百八十五番

左

隆信朝臣

一かたにまたまし物をほとゝきすする雲路の跡をさためは

もイ

右

通光卿

五月雨はけふをまちけりいつしかとあやめにつたふ軒の玉水

三百八十六番

左

有家朝臣

さみたれに山ほとゝきすをとつれて軒はのあやめ風かほる也

わたい

右

釈阿

夏の夜のなかくもあらは郭公いま一こゑもまたまし物を

三百八十七番

左

保季朝臣

五月雨に小田の水口せきもあへす浪こそ袖にさなへとる也

右

俊成卿女

郭公なく有明の空はれていつくの露の袖にちるらん

三百八十八番

左

良平

ほとゝきすたつねくらせる木のもとにこたふる物は嶺の松風

右

丹後

あしの葉にけふのあやめを引そへていくへに成ぬこ屋のやへふき
ひイ
ふき
よイ

三百八十九番

左

具親

津の国のあしのまろやの五月雨にひまこそなけれ雲の八重ふき

右

越前

郭公ことつてんまてなけれともやよやまてとはいはまほしきを
ほしきをイ
し物を

三百九十番

左

顯昭

をとなしの山ほとゝきすいつよりかこゝになくとは人にしられし

右

定家朝臣

夕くれは鳴ね空なる郭公心のかよふやとやしるらむ

三百九十一番

左

女房

心あてに聞はやきかん時鳥雲路にまよふみねのひと声

右

家隆朝臣

ときも時それかあらぬか郭公こそその五月のたそかれの空

三百九十二番

左

左大臣

かさゝきの雲のかけ橋ほとやなき夏の夜わたる山のはの月

右

雅經

たち花のにはひは今そ郭公なかはなくへきゆふくれのそら

三百九十三番

左

前権僧正

郭公涙はなれに声はわれにたかひにかして幾夜へぬらん

右

寂蓮

本欠行

五月雨の空のみ夏はくもるか
は月をなかめし池のうき草

三百九十四番

左

公継卿

本欠行

五月雨にゆけのかはらのむもれ木も頭てこそ流きにけれ

右

家長

明まもくるゝもしらぬそらの雲軒までとつる五月雨の山

そらい

三百九十五番

左

公経卿

ほとゝぎすあはれもふかく位。に杉のあみ戸の明暮の声

山

右

三宮

さきにけむ花はまたきの夏草にまつ一色に露むすひけり

三百九十六番

左

季能卿

ともしすと山の小雨に立わひてあはれにもうき袖もぬれけり

右

内大臣

五月雨はみかさもえこそさしあへね木の下露のかゝるしけさに

三百九十七番

左

宮内卿

屋とやあらぬ花や五月の花ならぬ山ほととぎすよそにのみして

右

忠良卿

たち花の昔にかほる袖に又けふのあやめもねはかゝりけり

三百九十八番

左

讃岐

夏むしのともしすてたるひかりさへのこりて明しのゝめの空

右

兼宗卿

とことばに鳴とも人やあかさらんさて心みよ山ほとゝきす

三百九十九番

左

小侍従

五月雨に水やこゆらん沢田かは袖つくはかり浅かりしかと

右

通光卿

さなへとるけふ面影に立そめていな葉もそよの秋のはつかせ

四百番

左

隆信朝臣

一こゑの後はうらみしほとゝきす聞心ちせぬ時しなけれは

右

釈阿

よそへても昔はいまはかひもなし花たちはなの袖のかもかな

四百一番

左

有家朝臣

この比は月をまつへき山のはをいくよへたてつ五月雨のそら

右

俊成卿女

露けさもあはれとそおもふ風にイになひくしけみにしける床夏の花

四百二番

左

保季朝臣

五月やみいく夜の雨にぬれぬらん出入月のかけを忘れて

右

丹後

さみたれに庭のさゆりは水こえていりぬる磯の草かとそみる

四百三番

左

良平

の敷

夏かきの玉江の芦やくちぬらん浪に鳥ゐる五月雨の比

右

越前

初こゑにかきらさりけり郭公聞ての後も猶そまたるゝ

四百四番

左

具親

一こゑのあかぬ名残は郭公うらみてあかすしのゝめのそら
月

右

定家朝臣

またれつゝ年にまれなる時鳥五月はかりの声な惜みそ

四百五番

左

顯昭

今はとていなはの山のほとゝきす忘かたみのひとこゑもかな

右

通具朝臣

ともしする木の下やみを分ぬれて露にみたるゝ忍ふもちすり

四百六番

左

女房

あし引の山郭公をちかへりしのゝつくにぬるゝゆふくれのそら

右

雅經

いにしへやみぬ面影もたちはなの花ちる里のあり明の空

四百七番

左

左大臣

まくす原玉まくくすイ数やまさるらんはなつイにをく露にほたるとふ也

右

寂蓮

むかしとも思なすへき身の程を花たち花にとふ人もかな

四百八番

左

前権僧正

屋よやいかに山郭公我さへそすみわたる身ふの猶もつらきにつれなきにイ

右

家長

五月雨によとのつき橋跡もなしくこれもなからの名をなかしつる

四百九番

左

公継卿

五月雨のにイとかに暮す夕くれをおとろかしつる時鳥かな

右

三宮

よしの川花をのみやはたつぬへきとへかし人のさみたれのころ山イ

四百十番

左

公経卿

郭公きの丸とのゝ雲井にてあさくら山つイをおもひ出のこゑ

右

内大臣

ことしけししはしはたてんまきの戸をたゝくゝひなよ明はてすともらんイ